

# はっぴーカーマン

1980.3月

NO16

事務局 津田尚美

Tel

編集 岸本桂子

生きがい

久木原勢津子

逐次刊行物

14.10.14

国立女性教育会館  
女性教育情報センター

一九七〇年十二月の一周間、私は何もすることがなかった。はじめの海外、サンフランシスコである。一日目、二日目、眠り続けた。三日目、デパートのスカーフ売場に立ちつくしていた。一時間だったか二時間だったか、あれを恍惚のひとときというのだろうか。マネキンの早口言葉はまるで分からなかったが、身に快よかった。スカーフは手品師に操られるように組み、ほどけた。四日目は道端に坐りこんで空を眺めていた。あしたはスケッチブックを買おう、と思いついた。結局スケッチブックは買わなかった。だがあの数日のことはあまらずおぼえていられる。

いつも、中途半端にしか生きていない。と思うとき、燃焼していかないで不幸な気持ちになる時、一九七〇年のあの時を思い出す。完全に無名で自由に且つ貧しかった。しかし充実していた。その充実感が今の原動力である。

あの時をどうしたら手に入れることが出来るだろうか？ふだんの中に……

生きがい論が盛んである。それは私にとって単純な要素に還元される。あの時のような時間と空間があればよい、と思う。

私は解放途上の女であり、また修業中の身なので、出来るものの良し悪しよりも、それに全力投球することにはまず意を尽す。集中できる時間をつくることは絶対の大事である。

家事はつまらない、よしなさいヨ、といまわりの女たちにオセツカイをいうのも家事は時間をくいちぎり、気を散らし、クリエイティブでないからである。それにしても私の机の引出し、ノートのほかに家事、料理のメモ、切抜きがどんなに多いか……きょうからは断じてそうは生きないぞ、とくり返し、日常の中の非日常をほんの少し手に入れようとしている。

## 田吉会長の近況

昨年末より原爆病院にて療養中。  
「4月いっぱいはおとなしくしてつもらい」と云われましたが、ベッドのまわりには、新聞の切抜き、雑誌、書類でいっぱい！

## 『第4回文化講演会 総括』

西山久美子

2月例会にて講演会の感想、今後の問題など話し合った。当日の出席者は桑原、岸本、小川、津田、後藤、加藤、西山の7名であった。

### 1. 取り組み

昨年11月例会で急拠、宮本、本田、西山が担当することとなり、宣伝、配券など宮本さんを中心に積極的に取り組んだ。

### 宣伝関係

朝日新聞、加藤奈智子、長崎新聞、桑原勢津子、KTVテレビ「今日は、長崎60秒スポート」松崎澄子、津田尚美、NBCラジオ中いらいワイドNBCの中に取り上げる。  
更に事務局より、朝日、毎日、読売、西日本新聞のお知らせ欄で紹介。

### 配券

会員一人10枚あて配券。事務局、喫茶VORCE、浜屋プレイガイドにも置く。

### 招待

各新聞社、女のノート3年「のタイムス」に載せた婦人団体、中央公民館図書室。

## 2.

### 講演会の感想

出席者の意見を要約すると、講師の素顔の魅力、話の豊富さ、事前に著作を読み会に臨んだことにより、講師の強調点がきけたこと、一日講師を独占することの有意義さなどであった。  
反面、テーマそのものに抵抗を感じた会員もいたという。又、一般の出席者の中には、講師の知名度というより、BWの会そのものにひかれて来たという人もいたとのこと。今後の会のもち方としてBWの会の主旨に沿ったもので計画していけるものではないかという意見も出された。  
更に会場よりのアンケート、その後の事務局への電話など一般の方からも様々の反響があったことを事務局よりきく。この件については津田さんより報告していただく。

## 3.

### 決算

満席赤字であった。大きな原因は会員一人当り10枚のノルマが果せず、16枚の売り上げだった点にある。やはり会員の責任として、最低2枚(自分と友人二人)ぐらいは持つべきであるとの意見があった。  
しかし反面、当日の入場者が知名あり、宣伝の効果、一部会員の積極的な働きかけがあったのではと考える。  
又、講師の著書「女人の生き方」が不足したことも反響させられた。

支出の点で、予算の範囲で納得したが、看板は毎回使用可能なものが考えられないかという意見が出て、来年の課題となった。その他、懇親会出席者には、その費用の一部を会費担とすることを考慮する必要があるとの意見が出た。最後に、会員の皆様のご協力に感謝します。

# 「講演会のおと」

事務局がひろった感想のメモ帖」より

事務局 津田尚美

「職場にあっても、又恋愛においてもいちずに積極的な人生に対する行動に感激した。」

「講演会のおと、フルニエ、万年喜での話し合い、会食の雰囲気、その後又、お茶を飲みながらのオシヤベリで、彼女がみんなに気をつかい、サービス精神旺盛で、彼女と一緒にいるのが楽しく、その後まだまだついて行きたかった。」

「もっと女についての本質的な話を聞きたかった。ルポルタージュの話は話としては面白かったが、一時固半終わった後、何か物足りない気がした。」

「前日の落合恵子がタタとして350円は高すぎる。」

「映画と比べりや安いくらい。」

「東京からの往復の旅費などで、満席赤字を考えると、あの位の話、誰か長崎にいないだろうか？」

「あの話は都会の人の話。長崎の人の話ではあれだけの経験や行動の話は聞けない。東京から呼んだ価値は十分あった。」

「講演会だけでは物足りないと思った人もいるかも知れないが、その後フルニエに行くと十分満足した。講演会では会員が一日、講師を独占できる会員のための会だ。」

「会員がもっと素直に自分を出して話し合える会にしたい。」

「それにしてもBWの会ってセックスの話が好きねえ。」

「女の性について考えるの題はもう今年で終りにしてほしい。」

「小沢遼子さんに比べて人間的に未熟という気がした。」

「いろんな意味で問題提起はあ、たと思う。」

二月五日例会では、事務的な報告以外に余り出なかったが、全体的には、彼女の積極性、明るさを身近に感じられることがたくさんあって、すばらしいと思えた。もっと女がいかにかに生くべきか根本的なしめくりがほしかったという意見があった。又、事務局に個別に入った話にも、講演会の後の質問の時に「主人が死ぬ時、やっぱり子供がほしい」といわれた方が、「あの時、あの場所でも自分自身中とりもなかつたし、いい表し方も十分でなかったが、人の子も教え子も子供として愛することが出て来ると思っていた自分の若さ、割りきり、納得して決めた人生のつもりが、生まなかったのは自分の身勝手だったんではないか」と思った時の悲しさを感じたかったのです。

それというのも若い人達が誇りをもって仕事をしている。とりわけB.W.の会の人達の熱意が令て、うれしかったからです。渡辺さんの「女一人の生き方」を買って気持よく帰りました。」とのことでした。

当日の皆さんの答え方に冷たさを感じた年配の方々も少なからずいたようでした。

皆さんのKTNテレビ「今日はノ長崎」出演の後、講演会に行けなかったのが本当に残念です。子供を産みだしたのに産めなかった者に対しての世間の冷たさ、産んでない人には令うない子供がいけない女は女でないみたいになんか方をされてきた。産む性、産まない性、産まない性、産まない性の立場から渡辺さんの話を聞きたかったという電話。

事務局として確かに忙しいことながら生活の中にそれらのことを面白い出来事として受けとめた私の気持ちも皆に又知らせたい。

## 新会員紹介

刈田玲子（一）

勤務

母親として、自う女の子をスポイルしていると思ふ。父親が男の子を産むべく一人立ちできるようにしつけようとするのと反対に、母親は女の子を産むだけ男より上にいかないよう育てている。日常の会話や対話の言葉を思い出してみられるがよい。

自分は女なのに、無意識の内にも、女を卑下していると思う。いろいろな理由はあるだろうけれど、

その衣には、女は嫁にいて、家庭に入るのが一番いいのよという考えが一貫して流れていることに気がつけられよ。そしてそれは、長い男社会の歴史の中で男だけが仕事をしやすいように女に要求されてきたことを、いつのまにかまるで女が願ったかのように我々の口からでてくるものであることを意識されよ。

女が男の競争者になつたら男はどうなるだろう。今、女は自立の三要素の一つである生活の自立（つまり巢をととのえて、自分で料理できること）をもっているからとても強い。これに著々と精神的自立をめざし、一つまり、ばってん・ウーマンの会）最後に経済的自立でノックダウンというところだろう。

今、政府も「家庭の日」などと、誤解されやすい休日をもうけようとしたりして、男の最後の砦である経済的自立を女に渡すまいと必死のようであるが、時の流れでそうはいくまい。男と女が、生まれつきの時から同等のスタートラインに立った時はじめて、フェアな競争が展開される。生まれつから、やっぱり女はどうのこうのといわれ続けて20年もたつたら、やっぱり私は、男より劣るんじゃないかしら。と自信をなくすのも当り前でしょう。ウーマンの会のママたちは、御自分の成長も大事にしなから、後につづく女の子たちの育て方には十分気をつけてあげなくちゃ、ね。



◎文化講演会のテープ貸出します。  
一週間三百円（郵送の場合送料も）  
事務局 津田尚美まで連絡を

◎渡辺圭 著「アジアの民と日本人」  
国書刊行会 定価九五〇円  
事務局にあります。

◎私たちの映画祭「女なりやってみな」

行動を起したい女の会 主催

5月1日（木）NBCビデオホール（別館）

午後2時30分～3時40分

夜 6時30分～8時10分

前売券八百円 事務局 津田尚美まで、

◎新会員のためのアンケート用紙を作成しました。

◎毎月発行の会報に原稿を募集します。  
何でも書ける。何でもいえるBWの会。

ぼってんウーマンミニ図書館

今回は今まで会報に載せたものの中から再び、ピックアップしてみました。

○ あごらミニ・あごら本誌

BOC出版部 (桑原・宮本・岸本)

○ フェミニスト (隔月間)

牧神社 (後藤・岸本)

○ 女・エロス (季刊誌)

社会評論社 (隠崎)

○ 家事作業をどうとらえるか

全国高校女子教育問題研究会 (岸本)

○ 女の子の育て方 樋口恵子著

(市民会館図書館)

○ 飛ぶのが怖い エリカ・ジョング著

新潮文庫



○ からゆきさん 森崎和江著

朝日新聞社 (岸本)

○ アジアの民と日本人 渡辺圭著

国書刊行会 (市民会館図書館)

○ 女一人の生き方 渡辺圭著

主婦と生活社 (多くの会員がもっています)

読書は秋。という風潮がありますが、そんなことはありません。読書は春です。春になって木々の芽がふき新しい年度が始まる時、今こそ新しい私たちのために一冊の本を手にとってみませんか。会員同志で感想を述べ合うのも又、いろいろな刺激になることと思います。さあ、あなたを本が待っています。

(吉村)

